



Japan  
Food  
Research  
Laboratories

## 試験報告書

第 209032076-001号  
2009年(平成21年)05月20日

依頼者 エコシンフォニー株式会社

検体 除菌剤D (次亜塩素酸水)

表題 ウイルス不活化試験

2009年(平成21年)03月27日当センターに提出された  
上記検体について試験した結果は次のとおりです。

財團法人  
**日本食品分析センター**



東京本部 〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町52番1号  
大阪支所 〒554-0051 大阪府吹田市豊津町3番1号  
名古屋支所 〒460-0011 名古屋市中区大須4丁目5番13号  
九州支所 〒812-0034 福岡市博多区下呂敷町1番12号  
多摩研究所 〒206-0025 東京都多摩市永山6丁目11番10号  
千歳研究所 〒066-0052 北海道千歳市文京2丁目3番  
彩都研究所 〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ7丁目4番41号

## ウイルス不活化試験

### 1 依頼者

エコシンフォニー株式会社

### 2 検体

除菌剤D (次亜塩素酸水)

### 3 試験目的

検体のネコカリシウイルスに対する不活化試験を行う。

### 4 試験概要

検体にネコカリシウイルス(ノロウイルスの代替ウイルス)のウイルス浮遊液を添加、混合し、作用液とした。室温で作用させ、経時的に作用液のウイルス感染価を測定した。  
なお、あらかじめ予備試験を行い、ウイルス感染価の測定方法について検討した。

### 5 試験結果

結果を表-1に示した。

また、細胞維持培地で作用液を10倍に希釈することにより、検体の影響を受けずにウイルス感染価が測定できることを予備試験により確認した。

なお、ネコカリシウイルスは、細胞培養が不可能なノロウイルスの代替ウイルスとして広く使用されている。

表-1 作用液のウイルス感染価測定結果

試験 ウイルス	対象	log TCID <sub>50</sub> /ml <sup>*1</sup>					
		開始時	15秒後	30秒後	1分後	3分後	10分後
ネコカリシ ウイルス <sup>*2</sup>	検体	6.7	<1.5	<1.5	<1.5	<1.5	<1.5
	対照	6.7	***	***	***	***	6.7

TCID<sub>50</sub> : median tissue culture infectious dose, 50 %組織培養感染量

\*1 作用液1 ml当たりのTCID<sub>50</sub>の対数値

\*2 ノロウイルスの代替ウイルス

開始時：作用開始直後の対照のTCID<sub>50</sub>を測定し、開始時とした。

対照：精製水

作用温度：室温

<1.5：検出せず

\*\*\*：実施せず

ウイルス浮遊液：精製水で10倍に希釈したもの

## 6 試験方法

### 1) 試験ウイルス

*Feline calicivirus F-9 ATCC VR-782*(ネコカリシウイルス)

### 2) 使用細胞

CRFK細胞[大日本製薬株式会社]

### 3) 使用培地

#### ① 細胞増殖培地

イーグルMEM培地「ニッスイ」①[日水製薬株式会社]に牛胎仔血清を10 %加えたものを使用した。

#### ② 細胞維持培地

イーグルMEM培地「ニッスイ」①に牛胎仔血清を2 %加えたものを使用した。

### 4) ウィルス浮遊液の調製

#### ① 細胞の培養

細胞増殖培地を用い、使用細胞を組織培養用フラスコ内に単層培養した。

#### ② ウィルスの接種

単層培養後にフラスコ内から細胞増殖培地を除き、試験ウイルスを接種した。次に、細胞維持培地を加えて37 °C±1 °Cの炭酸ガスインキュベーター(CO<sub>2</sub>濃度：5 %)内で1～5日間培養した。

#### ③ ウィルス浮遊液の調製

培養後、倒立位相差顕微鏡を用いて細胞の形態を観察し、細胞に形態変化(細胞変性効果)が起こっていることを確認した。次に、培養液を遠心分離(3,000 r/min, 10分間)し、得られた上澄み液を精製水で10倍に希釈し、ウィルス浮遊液とした。

### 5) 試験操作

検体1 mlにウイルス浮遊液0.1 mlを添加、混合し、作用液とした。室温で作用させ、経時的に細胞維持培地を用いて10倍に希釈した。

なお、精製水を対照として同様に試験し、開始時及び10分後に測定を行った。

#### 6) ウイルス感染価の測定

細胞増殖培地を用い、使用細胞を組織培養用マイクロプレート(96穴)内で単層培養した後、細胞増殖培地を除き細胞維持培地を0.1 mlずつ加えた。次に、作用液の希釀液0.1 mlを4穴ずつに接種し、37 ℃±1 ℃の炭酸ガスインキュベーター(CO<sub>2</sub>濃度：5 %)内で4～7日間培養した。培養後、倒立位相差顕微鏡を用いて細胞の形態変化(細胞変性効果)の有無を観察し、Reed-Muench法により50 %組織培養感染量(TCID<sub>50</sub>)を算出して作用液1 ml当たりのウイルス感染価に換算した。

以 上